



：巻頭言：

『2010年いよいよ当用期』に感じた事

協友アグリ(株)
開発普及部 部長

池田芳治

2010年も5月に入り、各地域で本格的な田植シーズンが始まった。

ゴールデンウィーク中、故郷の山口県に帰省し、山口から東京へ帰京する際、東海地方から中国地方の水田風景を眺めることが出来た。連休が明け、仕事に戻ってからは水稻用除草剤や育苗箱処理剤の試験などで東北地方、関東地方、北陸地方に出張し、現地の方々と接する機会があった。久し振りに各地方での田植時期に接し、当方なりに感じたことを書き記し、末筆ながら当方の巻頭言とさせて頂きたい。

地域の気温、稲の品種、品質向上、水の確保など理由は色々あると思うが各地域で田植時期の違いを目にすると『同じ日本なのに』と驚く。

実際に3月初めの早場米地帯から九州普通期の7月田植まで、その間なんと4ヶ月間にも及ぶ。

品質向上を目的に従来の田植時期を変更する指導をしている地区もある。

北陸地方の中には乳白米発生抑制を目的に田植時期を従来のゴールデンウィーク前後から5月中旬以降になるよう指導されている。

乳白米の発生を抑制し、地域全体の米の品質向上が目的になる。

この指導は5月12日、ほくほく線と北陸線の車窓から水田を見た際、さらには現地を巡回した際に肌で感じる事が出来た。

また、田植機の速度が速くなった事に驚いた。

私の視界には広い水田地帯の中で、数台の田植機がすばらしく速く水田を疾走していた。

これが規模拡大や請負耕作を可能にしているのだろう。

出張で行った東北の某地区では、地域の水田耕作の殆どを請負う地元企業が大型機械を駆使して、代掻き・田植など農作業をサポートしているとの事。

疾走している田植機のそばでは家族総出で小さな水田に手植えをしている農家がおられた。

ご両親に加え、サラリーマンか大学生の兄弟がなれない手つきで手植えをしている光景がほえましかった。

農業の二極分化現象を見た思いである。

農業経営の形態、栽培・耕種管理の変化が周辺環境の変化も産んでいく。

そこに新たなニーズが生まれてきている筈。

栽培規模拡大のニーズから高速田植機が生まれ、省力のニーズから水稻用一発処理除草剤の普及が図られ、さらに田植同時処理のニーズが高まってきているのだと思う。

一方で抵抗性雑草を含む一部の難防除雑草が顕在化し、特定の難防除雑草対応という新しいニーズも生まれてきている。

産地のブランド化を目指して化学農薬成分数、化学肥料投下量を半減させる地域も多くなりつつあり、現状の複数成分と同じ効能を持つ単一成分も求められてきつつある。

現場のニーズに応える事が農業研究・開発・製造・販売メーカーの重要な使命である。

農業行政、自社・他社の新剤開発状況等の情報収集は勿論大事だが、農業現場がどのようなのかを、現場に行き肌で感じる事の大事さを、ほんの少し強く思えた次第である。